

子どものスポーツに関する研究

—スポーツクラブからの離脱を中心に—

藤原 誠¹⁾

A Study on the Sports of Children

—To Focus on Dropout of Sports Club—

Makoto Fujiwara¹⁾

Key words : Children, Sports Club, Dropout

キーワード：子ども スポーツクラブ 離脱

I. 緒 言

子どものスポーツ活動は、発育・発達の途上にある子どもにとって、さまざまな意義をもつ活動として、捉えられる。たとえば、身体的な発育・発達に対する意義、精神的発達や社会的発達に対する意義などである⁷⁾¹⁰⁾¹¹⁾¹²⁾。このような子どものスポーツの意義は、子どもを組織的なスポーツに参加させている親にも広く認識されており、子どもにスポーツを実施させる、よりどころとなっている⁶⁾。このことは、組織的スポーツに参加させている親の期待内容¹²⁾からも容易に推察される。また、子どもを指導している指導者も、同様の目標をもって指導にあたっている⁹⁾。しかし、現実には、これらのスポーツに対する期待や目標とは別に、スポーツにおける勝利を追求する傾向は高まりをみせており、この勝利追求の姿勢から、子どものスポーツをめぐるさまざまな問題⁵⁾⁸⁾⁹⁾も生起しているように思われる。

生涯スポーツの立場から考えると、子どもの時期にスポーツに親しむことは大変重要なことであるが、中には、一度スポーツを始めても、さまざまな理由で、スポーツから離脱していく者もいる。このことは、生涯にわたってのスポーツの継続的实施という観点からすると、大きな問題といえよう。そこで今回は子どものスポーツをめぐるさまざまな問題の中から、一度はスポーツの組織に加入し、スポーツ活動を実施してい

たにもかかわらず、何らかの理由でやめてしまった者に焦点をあて、組織的スポーツからの離脱の問題を取り上げることとした。

ところで、子どもの組織的スポーツとしては、学校においては、いわゆる部活動を中心としたスポーツクラブ、学校外においてはスポーツ少年団に代表されるようなスポーツクラブなどがあげられる。学校における部活動は、愛媛県松山市の小学校においては、社会体育への移行期にあり、教員による指導から、地域の指導者による指導へ移りつつある。ただ、社会体育への移行とはいえ、メンバーの募集は学校を通して行われ、活動も学校の施設を使用して行われていることから、学校におけるスポーツ活動という性格はそのまま残されている。このような、学校を中心としたスポーツクラブに加え、学校外においては、スポーツ少年団をはじめとするスポーツクラブ等に加入してスポーツを実施している子どもも多い。

本研究では、先に述べたように、子どもの組織的スポーツからの離脱の問題を取り上げることとするが、具体的には、上述の学校を中心としたスポーツクラブや学校外のスポーツクラブを取り上げ、継続的に参加している者と離脱した者を比較することにより、継続者、および、離脱者の特徴を明らかにし、離脱の要因を探ることを目的とした。

1) 愛媛大学教育学部
〒790 愛媛県松山市文京町3番

1. Faculty of Education, Ehime University,
Bunkyo-cho, 3, Matsuyama-shi, Ehime, 〒790,
Japan

Ⅱ. 方 法

1. 調査対象

愛媛県松山市の小学校4校の5年および6年の全児童1,214名を調査対象とした。

2. 調査方法

質問紙による配票調査を実施した。学級担任を通して配票、回収を行い、有効標本数は947であった。

3. 調査時期

1996年7月に実施した。

4. 調査内容

スポーツクラブへの加入者には、遊び・学習塾・けいこごとの状況、スポーツにおける勝敗観、スポーツクラブでの活動状況・活動意識、父母の関与状況などについて、スポーツクラブ離脱者には、遊び・学習塾・けいこごとの状況、スポーツにおける勝敗観、加入していた当時の活動状況・活動意識、父母の関与状況などについて、スポーツクラブへの加入経験がない者には、遊び・学習塾・けいこごとの状況、スポーツにおける勝敗観などについて調査した。

5. 分析の視点

本研究では、スポーツクラブに継続的に参加している者と離脱した者を比較することにより、継続者および離脱者の特徴、離脱の要因を明らかにすることを目的とするため、スポーツクラブへの加入経験がない者、および、スポーツクラブへの加入が1年に満たない者は分析の対象から除外した。分析の対象者は、1年以上継続してスポーツクラブに参加している315名とスポーツクラブからの離脱者156名の合計471名である。この両者について、遊び・学習塾・けいこごとの状況、スポーツにおける勝敗観、スポーツクラブでの活動状況・活動意識、父母の関与状況などについて、比較検討していく。

Ⅲ. 結果と考察

1. 遊び・学習塾・けいこごと

(1) 遊 び

ふだんの遊びの場所や遊びの人数を示したのが表1および表2である。遊びの場所については、スポーツクラブに1年以上継続して参加している

者(以下、継続者という)、スポーツクラブを離脱した者(以下、離脱者という)の両者とも、64~65%の者が家の外で遊ぶことが多いとしている。遊びの人数は、両者とも2~3人がもっとも多く、ひとりで遊ぶことが多いとする者を加えると、60~70%の者が3人以下で遊んでいることになる。このことは、子どもの遊びの少人数化の実態を如実に示しているといえよう。

以上のように、遊びの場所や遊びの人数に関して、継続者と離脱者は同じような傾向を示しており、差異はみられなかった。

表1 遊びの場所

項目	分類		
	継続者	離脱者	合計
家の外	64.4	64.7	64.5
家の中	35.6	35.3	35.5

(%)

n.s.

(χ^2 検定による)

表2 遊びの人数

項目	分類		
	継続者	離脱者	合計
ひとり	6.7	9.7	7.7
2~3人	56.1	60.0	57.4
4~5人	29.9	24.5	28.1
6人以上	7.3	5.8	6.8

(%)

n.s.

次に、一番よくする遊びについてまとめると表3のようになる。継続者、離脱者のいずれにおいても、戸外でのスポーツ遊びと戸外でのスポーツ以外の遊びをあわせると、63~64%となっている。この数字は遊びの場所として家の外をあげた者とはほぼ一致している。継続者と離脱者を比較すると、戸外での遊び(スポーツ遊びとスポーツ以外の遊びの合計)と屋内での遊びの比率はほとんど変わらないが、戸外での遊びの内容に違いがみられる。つまり、継続者では離脱者に比べてスポーツ遊びが多く、スポーツ以外の遊びが少なくなっている。これは、継続者がスポーツ遊びを好んで行い、スポーツクラブで行っているスポーツをふだんの遊びとしても実施していることを示唆しているように思われる。

以上、ふだんの遊びについてまとめると、継続者と離脱者では、現在の遊びの場所や遊びの人数には差はみられないが、戸外での遊びの内容が継続者ではスポーツ遊びに限定される傾向がみられ

た。これは、継続者も離脱者も、ふだんの遊びに関して、同じような活動欲求をもって、同じように戸外や屋内で遊んでいるが、継続者は現在のスポーツクラブでの活動の影響もあり、スポーツ遊びが多くなっているものと思われる。

(2) 学習塾・けいこごと

学習塾やけいこごとの実施状況を示すと、表4から表6のようになる。学習塾に通っている者は39~40%、けいこごとをしている者は44~48%となっており、継続者と離脱者で差はみられない。週あたりの学習塾やけいこごとの日数をみると、学習塾やけいこごとをしていない者は32~35%であり、残りの65~68%の者は週に1日以上、学習

塾やけいこごとに通っていることになる。全体的にみると週に1日から3日程度の者が多いが、4日以上通っている者も10%程度いる。現在の子どもを取り巻く社会的な状況として、ここにみられるような教育熱の高まりを指摘することができよう。

週あたりの学習塾やけいこごとの日数においても、学習塾やけいこごとの実施・非実施の状況と同様に、継続者と離脱者に差はみられなかった。

このことは、スポーツクラブへの継続的参加や離脱とは次元の違ったところで、学習塾やけいこごとの実施がすすんでいることを示しているように思われる。

表3 一番よくする遊び

項目	分類		
	継続者	離脱者	合計
戸外・スポーツ遊び	45.2	31.4	40.7
戸外・スポーツ以外の遊び	18.6	31.4	22.8
屋内遊び	36.2	37.2	36.5

(%)
p<0.01

表4 学習塾

項目	分類		
	継続者	離脱者	合計
通っている	39.0	40.1	39.4
通っていない	61.0	59.9	60.6

(%)
n.s.

表5 けいこごと

項目	分類		
	継続者	離脱者	合計
している	48.4	44.1	47.0
していない	51.6	55.9	53.0

(%)
n.s.

表6 学習塾・けいこごとの日数(週)

項目	分類		
	継続者	離脱者	合計
していない	31.8	34.6	32.8
1日	20.5	18.7	19.9
2日	26.1	18.0	23.4
3日	12.1	18.7	14.2
4日	4.9	6.0	5.3
5日以上	4.6	4.0	4.4

(%)
n.s.

2. スポーツにおける勝敗観

子どものスポーツに関して、勝利至上主義から生じるさまざまな問題があることは、よく指摘されるところである。それらの勝利至上主義から生じるさまざまな問題は、もとをただせば、子どもを取り巻くおとなからもたらされたものとして捉えることができよう。子どもたちは、おとながもつスポーツ観から影響を受けながら、自らのスポーツ観を形成し、スポーツ活動を実施しているものと思われる。以下では、実際にスポーツを実施している子どもたち、あるいは、スポーツを実施していた子どもたちが、スポーツの勝敗について、どのような意識をもっているのかという、子どもがもつスポーツにおける勝敗観について検討する。

スポーツの試合での勝敗について述べた意見⁴⁾に

対する賛否は次のようであった。勝利至上主義的な傾向を示す「試合にでるからには勝たねば意味がない」、「勝つためには、少々ずるいことをしてもしかたがない」、「勝つためには、へたな人のことなどかまっていられない」についての賛否は、表7から表9に示す結果となった。

「試合にでるからには勝たねば意味がない」について、「そう思う」という者は、離脱者の9.6%に対して、継続者では約2倍の18.7%となっている。「どちらかといえばそう思う」という者をあわせると、継続者では40%以上の者がこの意見を肯定的に捉えており、継続者の方が離脱者に比べて試合での勝利を重視する傾向がみられる。

「勝つためには、少々ずるいことをしてもしかたがない」については、全体的に、肯定的に捉える者

表7 スポーツ試合での勝敗観(1)

「試合にでるからには勝たねば意味がない」に対する賛否

項目	分類	(%)		
		継続者	離脱者	合計
そう思う		18.7	9.6	15.7
どちらかといえばそう思う		22.5	18.6	21.2
どちらかといえばそうは思わない		30.9	32.1	31.2
そうは思わない		27.9	39.7	31.9

p<0.05

表8 スポーツ試合での勝敗観(2)

「勝つためには、少々ずるいことをしてもしかたがない」に対する賛否

項目	分類	(%)		
		継続者	離脱者	合計
そう思う		6.7	0.6	4.7
どちらかといえばそう思う		8.6	5.8	7.6
どちらかといえばそうは思わない		22.2	25.6	23.4
そうは思わない		62.5	68.0	64.3

p<0.05

表9 スポーツ試合での勝敗観(3)

「勝つためには、へたな人のことなどかまっていられない」に対する賛否

項目	分類	(%)		
		継続者	離脱者	合計
そう思う		8.6	6.4	7.9
どちらかといえばそう思う		12.4	12.2	12.3
どちらかといえばそうは思わない		31.1	39.1	33.8
そうは思わない		47.9	42.3	46.0

n.s.

は少ないが、継続者と離脱者を比較すると、継続者の方に「そう思う」、あるいは「どちらかといえばそう思う」という者が多くなっている。このように、継続者の方に、少々、フェアプレーの精神に反することをしても勝利を得たいという者が多くなっており、勝利のみにこだわる傾向がうかがえる。

「勝つためには、へたな人のことなどかまっていられない」については、「そう思う」、あるいは「どちらかといえばそう思う」という者は、継続者、離脱者のいずれにおいても20%程度となっており、両者間に差は認められない。継続や離脱のいかんにかかわらず、勝利を得るために、技能が劣っている仲間を無視したり排除するという考えをもつ者は比較的少なかった。

次に、勝利を求めることによって、あるいは、勝利を獲得することによって、さまざまな利点や効果が得られるという、勝利追求を是認する考え方に対する賛否は以下ようになった。

表10は「勝つつもりで試合をしないとよいプレイはできない」という意見に対する賛否を示している。「そう思う」という者は、継続者で61.5%、離脱者で41.1%、「そうは思わない」という者は、継続者で4.8%、離脱者で12.8%となっており、継続者の方に勝利を求めるからこそ、よいプレイができるとする者が多い。

同様に、表11は「勝とうと思うから、一生懸命に試合ができるのである」という意見に対する賛否を示している。「そう思う」という者は、継続者で

71.7%、離脱者で59.0%、「そうは思わない」、あるいは「どちらかといえばそうは思わない」という者は、あわせると、継続者で8.9%、離脱者で14.7%となっている。ここでも、継続者の方に、勝とうと思う、つまり勝利を求めるからこそ、一生懸命に試合ができるとする者が多くなっている。

表12は「試合に勝ってこそ、他のみんなから認められるものである」という意見に対する賛否を示している。この意見については、肯定的に捉える者と否定的に捉える者が、ほぼ同程度であり、継続者と離脱者の間にも差はみられない。

以上のように、勝利至上主義的な考え方については、同じ集団の仲間を無視、排除するような「勝つためには、へたな人のことなどかまっていられない」に対しては、継続者、離脱者とも否定的な立場をとる者が多く、両者間に差はみられなかった。しかし、勝利至上主義的傾向を端的に示す「試合にでるからには勝たねば意味がない」、あるいは、公正な態度を否定する「勝つためには、少々ずいことをしてもしかたがない」という意見に対しては、継続者の方が離脱者に比べて肯定的な立場をとる者が多く、勝利至上主義的傾向を示した。また、勝利追求を是認する意見、「勝つつもりで試合をしないとよいプレイはできない」、「勝とうと思うから、一生懸命に試合ができるのである」に対しても、継続者の方が離脱者に比べて肯定的な立場をとる者が多く、勝利追求の姿勢を望ましいものとして是認する傾向がみられた。

表10 スポーツ試合での勝敗観（4）

「勝つつもりで試合をしないとよいプレイはできない」に対する賛否 (%)

項目	継続者	離脱者	合計
そう思う	61.5	41.1	54.8
どちらかといえばそう思う	25.4	36.5	29.1
どちらかといえばそうは思わない	8.3	9.6	8.7
そうは思わない	4.8	12.8	7.4

p<0.001

表11 スポーツ試合での勝敗観（5）

「勝とうと思うから、一生懸命に試合ができるのである」に対する賛否 (%)

項目	継続者	離脱者	合計
そう思う	71.7	59.0	67.5
どちらかといえばそう思う	19.4	26.3	21.7
どちらかといえばそうは思わない	6.0	9.6	7.2
そうは思わない	2.9	5.1	3.6

p<0.05

表12 スポーツ試合での勝敗観(6)

「試合に勝ってこそ、他のみんなから認められるものである」に対する賛否 (%)

項目	分類	継続者	離脱者	合計
そう思う		22.5	21.8	22.3
どちらかといえばそう思う		30.2	26.9	29.1
どちらかといえばそうは思わない		26.0	30.1	27.4
そうは思わない		21.3	21.2	21.2

n.s.

3. スポーツクラブでの活動実態

(1) 加入の契機

スポーツクラブへの加入のきっかけを示すと表13のようになる。自分がやりたかったから加入したという者は、継続者で74.5%、離脱者で58.4%であり、継続者の方に、自分の意志で加入を決めた者が多くなっている。離脱者では、誰かに勧められて加入した者も40%以上いる。このように、継続者の方に自分の意志で加入を決めた者が多く、離脱者の方に誰かに勧められて加入した者が多いことから考えると、周囲の人の勧めよりも、自分がやりたくて加入を決めることが、スポーツクラブでの活動を継続することにつながるように思われる。

(2) 活動日数・活動時間

継続者には、現在の活動日数や活動時間について、離脱者には、加入していた当時の活動日数や活動時間について尋ねた。活動時間については、平日、土曜日、および日曜日に活動を実施している者、あるいは実施していた者に限定して、その活動時間をまとめた。

週あたりの活動日数を示したものが表14であ

る。全体としてみると、週に3~4日がもっとも多くなっているが、週に5日以上となる、週に5~6日、あるいは毎日という者も、あわせると47.5%に及んでいる。スポーツクラブの活動が盛んに行われている状況がうかがえる。継続者と離脱者を比較すると、同様な分布を示しており、両者間に差異は認められなかった。

次に、日常的に行われる平日の活動時間をみると表15のようになる。継続者、離脱者とも、2時間以上3時間未満の者が最も多く、60~65%を占めている。これに次いで、継続者では3時間以上4時間未満、離脱者では2時間未満の者が多くなっているが、両者間に有意な差は認められなかった。

表16および表17は土曜日と日曜日の活動時間を示している。平日は活動できる時間がどうしても放課後の数時間に限定されるが、土曜日や日曜日は平日に比べて活動可能な時間が多く、クラブの方針で活動時間の長短が決められる可能性も高まるであろう。その活動時間をみると、土日も日曜日も3時間以上5時間未満の者が最も多く40~60%程度を占めている。日曜日では、5時間以上

表13 クラブ加入のきっかけ

項目	分類	継続者	離脱者	合計
自分がやりたかった		74.5	58.4	69.2
だれかにすすめられた		25.5	41.6	30.8

p<0.001

表14 活動日数(週)

項目	分類	継続者	離脱者	合計
1日		1.6	3.3	2.2
2日		8.7	10.5	9.3
3~4日		40.1	43.0	41.0
5~6日		37.7	32.7	36.1
毎日		11.9	10.5	11.4

n.s.

表15 平日の活動時間

項目	分類		
	継続者	離脱者	合計
2時間未満	13.5	23.4	16.7
2時間以上3時間未満	65.0	59.6	63.2
3時間以上4時間未満	18.5	13.5	16.9
4時間以上	3.0	3.5	3.2

n.s.

表16 土曜日の活動時間

項目	分類		
	継続者	離脱者	合計
2時間未満	9.8	15.4	11.4
2時間以上3時間未満	22.8	34.6	26.3
3時間以上5時間未満	60.5	43.3	55.4
5時間以上	6.9	6.7	6.9

p<0.05

表17 日曜日の活動時間

項目	分類		
	継続者	離脱者	合計
2時間未満	7.1	11.1	8.2
2時間以上3時間未満	12.7	30.6	17.5
3時間以上5時間未満	56.8	43.0	53.1
5時間以上	23.4	15.3	21.2

p<0.01

の長時間に及ぶ者も継続者で23.4%、離脱者で15.3%おり、子どものスポーツの長時間に及ぶ活動実態を示している。継続者と離脱者を比較すると、土曜日、日曜日のいずれにおいても継続者の方が離脱者に比べて活動時間が長い傾向がみられる。一般的なこととして、組織的スポーツからの離脱に、活動時間の長さが関係していることも予測されるが、ここでみたように、継続者の方に長時間活動している者が多いことから考えると、単に、活動時間が長いことを離脱の要因としてあげることにはできないであろう。

(3) 活動への参加状況と活動の楽しさ

スポーツクラブの活動への参加頻度は表18のようになる。継続者には現在の参加頻度、離脱者には加入していた当時の参加頻度について尋ねている。離脱者は、その後、スポーツクラブをやめることになるので、その関係からか、継続者の方が、参加頻度が高くなっている。いつも参加する者、あるいは、いつも参加していた者は、継続者

で49.5%、離脱者で13.5%となっており、大きな違いをみせている。

活動を休む理由を表19に示した。全体的にみると、「からだの調子がよくないとき」や「家の用事（家族で遊びに行く、親戚の家へ行くなど）があるとき」をあげる者が多いが、継続者では、これに加えて、「塾やけいこごとがあるとき」をあげる者が多い。これに対して、離脱者では「別に理由はないが、行きたくないとき」をあげる者が多い。この「別に理由はないが、行きたくないとき」という理由は漠然とした表現となっているが、その意味するところは、とりたてて行けない理由はないが、行く気持ちになれない、行く意欲がわからないなどといった、活動への意欲の欠如や、それに結びつく、活動への興味や関心の希薄化などを示しているように思われる。

次に、スポーツクラブでの活動の楽しさについて尋ねると表20のようになった。「とても楽しい」あるいは「とても楽しかった」という者は、継続

表18 活動への参加頻度

(%)

項目	分類	継続者	離脱者	合計
いつも参加する		49.5	13.5	37.6
いつも参加していた				
たまに休む		45.4	62.2	51.0
たまに休んでいた				
半々くらい		2.9	11.5	5.7
参加しないことが多い		2.2	12.8	5.7
参加しないことが多かった				

p<0.001

表19 活動を休む理由

M.A. (%)

項目	分類	継続者	離脱者	合計
からだの調子がよくないとき		57.9	49.6	54.1
家の用事があるとき		28.9	24.4	26.9
塾やけいこごとがあるとき		25.8	15.6	21.1
別に理由はないが、行きたくないとき		8.8	25.2	16.3
学校の行事があるとき		11.9	11.9	11.9
友だちと遊ぶ約束があるとき		5.7	15.6	10.2
地域の行事があるとき		3.1	4.4	3.7
その他		7.5	10.4	8.8

表20 活動の楽しさ

(%)

項目	分類	継続者	離脱者	合計
とても楽しい		62.2	24.2	49.7
とても楽しかった				
まあ楽しい		31.6	54.3	39.1
まあ楽しかった				
あまり楽しくない		3.9	13.7	7.1
あまり楽しくなかった				
楽しくない		2.3	7.8	4.1
楽しくなかった				

p<0.001

者では62.2%であるのに対して、離脱者では24.2%となっている。離脱者では継続者に比べて、楽しさを感じていた者が少なくなっている。逆に、「あまり楽しくない」または「あまり楽しくなかった」あるいは「楽しくない」または「楽しくなかった」という、楽しさを享受できなかった者は、継続者で6.2%、離脱者で21.5%となって

おり、離脱者の方が多い。このように、継続者は活動に楽しさを感じている者が多く、この楽しさを感じることで、その後の継続・離脱に影響を及ぼしているように思われる。

(4) 技能レベルと選手経験

表21はクラブ内での技能レベルを示している。継続者には現在のうでまえについて、離脱者には

加入していた当時のうでまえについて尋ねている。「うまい方」あるいは「どちらかといえばうまい方」というように、技能レベルが高いと回答した者は、継続者で64.8%，離脱者で40.4%となっ

ている。このように、クラブ内での技能レベルは継続者の方が高く、離脱者の方が低くなっている。技能レベルはクラブでの活動の経験年数に影響されることも考えられるので、離脱者について

表21 クラブ内での技能レベル（1）

項目	分類	継続者	離脱者	合計
うまい方		19.7	8.3	15.9
どちらかといえばうまい方		45.1	32.1	40.8
どちらかといえばへたな方		29.4	42.9	33.9
へたな方		5.8	16.7	9.4

(%)

p<0.001

表22 クラブ内での技能レベル（2）

項目	分類	継続者	離脱者	合計
うまい方		19.7	9.1	17.3
どちらかといえばうまい方		45.1	37.5	43.5
どちらかといえばへたな方		29.4	42.0	32.2
へたな方		5.8	11.4	7.0

(%)

p<0.01

表23 大会への選手としての出場（1）

項目	分類	継続者	離脱者	合計
いつも選手として出る		49.8	11.4	37.3
いつも選手として出た				
選手として出ることが多い		17.3	9.4	14.7
選手として出ることが多かった				
選手として出ることが少ない		17.9	25.5	20.4
選手として出ることが少なかった				
選手として出ることはない		15.0	53.7	27.6
選手として出ることがなかった				

(%)

p<0.001

表24 大会への選手としての出場（2）

項目	分類	継続者	離脱者	合計
いつも選手として出る		49.8	15.9	42.7
いつも選手として出た				
選手として出ることが多い		17.3	12.2	16.2
選手として出ることが多かった				
選手として出ることが少ない		17.9	26.8	19.8
選手として出ることが少なかった				
選手として出ることはない		15.0	45.1	21.3
選手として出ることがなかった				

(%)

p<0.001

も、継続者と同様に、経験が1年以上ある者に限定して比較すると表22のようになる。表21と同様に、技能レベルは離脱者に比べて継続者の方が高くなっている。

次に、継続者には、大会の時、選手として試合に出るかどうかが、離脱者には、大会の時、選手として試合に出たかどうかについて尋ねると、表23のような結果となった。いつも選手として出る、あるいは、いつも選手として出た者は、継続者で49.8%を占めているが、離脱者では11.4%にとどまっている。選手として出ることはない、あるいは、選手として出ることはなかった者は、継続者で15.0%、離脱者で53.7%となっており、大きな違いをみせている。離脱者を活動経験が1年以上の者に限定しても、表24に示すように、同様な結果となった。以上のように、離脱者は、継続者に比べて、クラブ内での技能レベルが低く、大会の

時も選手として出場する機会に恵まれなかった者が多くなっている。

4. スポーツクラブでの活動意識

(1) クラブ加入の功罪

スポーツクラブに加入してよかったと思うことをまとめると表25のようになる。継続者では、そのスポーツがうまくなったことをあげる者が50.8%を占めて最も多く、次いで、友だちができたこと、体がじょうぶになったことをあげる者が多くなっている。これに対して、離脱者では、友だちができたことをあげる者が48.7%で最も多く、次いで、そのスポーツがうまくなったこと、体がじょうぶになったこと、の順になっている。このように、継続者と離脱者では、スポーツ技能の高まりと友人の獲得の順位が逆転しており、継続者の方がスポーツ技能に関心をもち、上述した

表25 よかったこと

項目	M.A. (%)		
	継続者	離脱者	合計
そのスポーツがうまくなった	50.8	35.3	45.6
友だちができた	42.2	48.7	44.4
体がじょうぶになった	37.8	26.3	34.0
根性がついた	10.8	10.9	10.8
体育がとくいになった	10.2	5.8	8.7
試合で勝った	10.2	5.1	8.5
試合でいろいろなところへ行けた	7.0	4.5	6.2
れいき正しくなった	5.1	7.7	5.9
積極性が身についた	4.8	2.6	4.0
その他	1.3	1.3	1.3

表26 よくなかったこと

項目	M.A. (%)		
	継続者	離脱者	合計
友だちと遊べなくなった	47.6	50.6	48.6
練習や試合でつかれる	24.4	37.8	28.9
家族といる時間が少なくなった	21.0	12.8	18.3
テレビを見る時間が少なくなった	12.7	17.3	14.2
よくけがをする	15.6	10.9	14.0
練習や試合などが学校や地域の行事とかさなってしまう	14.9	10.9	13.6
態度や言葉づかいがらんぼうになった	4.4	1.9	3.6
学校の成績がさがった	3.8	1.9	3.2
その他	2.9	4.5	3.4

ように、高い技能レベルにあることを示唆している。また、割合はそれほど多くないが、試合で勝ったことをよかったこととしてあげる者は継続者の方に多く、勝利への関心の高さも示しているように思われる。

スポーツクラブに加入してよくなかったと思うことをまとめたものが表26である。継続者、離脱者のいずれにおいても、友だちと遊べなくなったことをあげる者が最も多くなっている。すでにみたように、学習塾やけいごごとに通う者も多く、それに加えて、スポーツクラブで活動することになると、時間的な余裕はなくなり、友だちとも遊べなくなるということだろう。次に多いのが、練習や試合でつかれることをあげる者である。継続者では24.4%であるのに対して、離脱者では37.8%となっており、離脱者の方が練習や試合による疲労を感じている者が多く、練習や試合が精神的に、あるいは、肉体的に彼らの負担となっていることが推察される。次に多いのは、継続者では、家族といる時間が少なくなったこと、離脱者では、テレビを見る時間が少なくなったことなどであり、やはり、時間的な余裕がなくなることによって生じてくる事項をあげる者が多い。

(2) 離脱意志と離脱理由

表27は継続者に対してスポーツクラブをやめたいと思うことの有無を尋ねた結果である。やめたいと思うことがよくあるという者は5.8%、ときどきあるという者は35.1%となっており、あわせて40.9%の者がやめたいと思うことがあると回答している。このように約4割の者は、さまざまな理由により、スポーツクラブからの離脱を意識したことがあるという結果となっている。次に、やめたいと思うことがあるという者に対して、どのようなときにやめたいと思うのかを尋ねると、表28のようになった。一番多いのは、指導者にしかられたときという者であり、やめたいと思うことがあるという者の31.3%を占めている。これに次いで、練習や試合でつかれたとき、友だちと遊べないときをあげる者が27.3%で多くなっている。子どものスポーツにおいて、子どもを取り巻くおとなが、子どもの活動や活動意識に影響を及ぼすことは拙論²⁾ですでに述べたところであるが、本研究においても、指導者の対応が子どものスポーツクラブからの離脱意識に関係していることがうかがえた。また、友だちと遊べないときや練習や試合でつかれたときにやめたいと思う者が多いことは、先述のスポーツクラブに加入してよくな

かったと思うことに対応している。

離脱者に対して、スポーツクラブをやめた理由を尋ねた結果が表29である。友だちと遊べなかったことをあげる者が最も多く21.8%となっている。次いで、これとほぼ同程度の21.2%を占める、練習の回数や練習の量が多くてついていけな

表27 やめたいと思うこと

項目	分類 (%)	
	継続者	
よくある	5.8	
ときどきある	35.1	
ない	59.1	

表28 やめたいと思うとき

項目	分類 M.A. (%)	
	継続者	
指導者にしかられたとき	31.3	
練習や試合でつかれたとき	27.3	
友だちと遊べないとき	27.3	
練習の内容がむずかしくてついていけないと思ったとき	8.6	
試合に出してもらえないとき	8.6	
試合で失敗したとき	8.6	
けがをしたとき	7.0	
スポーツクラブのことで親にしかられたとき	6.3	
学校の成績がさがったとき	3.9	
友だちがやめたとき	3.1	

表29 離脱の理由

項目	分類 M.A. (%)	
	離脱者	
友だちと遊べなかった	21.8	
練習の回数や練習の量が多くてついていけなかった	21.2	
あまりうまくならなかった	12.8	
練習や試合でつかれた	12.2	
他にやりたいことができた	12.2	
指導者とうまくやれなかった	11.5	
練習の内容がむずかしくてついていけなかった	10.9	
親にやめるよういわれた	9.0	
勉強に力を入れようと思った	8.3	
友だちがやめた	7.1	

かったという者が多い。練習や試合に関しては、練習や試合でつかれた、あるいは、練習の内容がむずかしくてついていけなかったという者もそれぞれ10%以上おり、全体としてみると、練習の質や量の問題、それらから生じる疲労などの問題によって、離脱していく者が多いといえよう。これらに加えて、あまりうまくならなかったという技能に関することをあげる者、他にやりたいことができたことをあげる者も多い。さらに、指導者とうまくやれなかったという、指導者との人間関係をあげる者も11.5%と比較的多い。以上にみられる、スポーツクラブの練習や試合で時間的な余裕がなくなり、友だちと遊べなくなること、練習や試合から生じる疲労、指導者との関係などは、継続者がスポーツクラブをやめたいと思う理由とほぼ一致しており、現在、スポーツクラブの活動を継続している者の中にも、離脱者と同様な状況の中で、離脱の要素をかかえながら活動している者が少なからずいることがわかる。

5. 父母の関与

子どものスポーツ活動への両親の関与が、子どものスポーツ活動実施や活動意識に影響を及ぼすことは、すでに論述したところ²⁾であるが、本研究では、

両親の関与と子どものスポーツクラブからの離脱という観点から検討する。

(1) 練習・試合の参観

表30はスポーツクラブの練習や試合を父母が見に来ることがあるか、あるいは、見に来ることがあったかどうかについて尋ねた結果を示している。継続者では、ときどきあるという者が47.6%で最も多く、次いで、よくあるという者が41.0%となっている。この両者をあわせ88.6%、約9割の者が父母が見に来ることがあるとしている。これに対して離脱者では、見に来ることがなかったという者が最も多く50.4%を占め、見に来ることがよくあった者とときどきあった者の合計は49.6%にとどまっている。このように、継続者の方が父母の練習や試合の参観の程度は高くなっている。

(2) 励まし

スポーツクラブで活動することに対する父母の励ましの状況を示すと表31のようになる。よくはげましてくれる、あるいは、よくはげましてくれたという者は、継続者で36.6%、離脱者で24.0%となっており、継続者の方が多くなっている。これに対して、はげましてくれることはない、または、はげましてくれることはなかったという者

表30 父母の練習・試合参観

項目	分類 (%)		
	継続者	離脱者	合計
よくある よくあった	41.0	15.0	32.5
ときどきある ときどきあった	47.6	34.6	43.4
ない なかった	11.4	50.4	24.1

p<0.001

表31 父母の励まし

項目	分類 (%)		
	継続者	離脱者	合計
よくはげましてくれる よくはげましてくれた	36.6	24.0	32.5
ときどきはげましてくれる ときどきはげましてくれた	45.2	50.1	46.7
あまりはげましてくれることはない あまりはげましてくれることはなかった	12.1	11.0	11.8
はげましてくれることはない はげましてくれることはなかった	6.1	14.9	9.0

p<0.01

は、継続者の6.1%に対して、離脱者では14.9%となっており、離脱者の方が多くなっている。父母の励ましについては、継続者が離脱者より、よく励ましを受けているという結果となっている。

以上のことから考え、父母がスポーツクラブの練習や試合を参観したり、スポーツクラブでの活動を励ますことがクラブ参加の継続につながるということが推察される。離脱者では父母の関与の少なさ、無関心が離脱の根底にあるように思われる。

IV. 結 語

本研究では、子どもの組織的スポーツからの離脱の問題を取り上げた。スポーツクラブに継続的に参加している者とスポーツクラブから離脱した者を比較することにより、継続者、および、離脱者の特徴を明らかにし、離脱の要因を探ることを目的とした。結果の概要は以下のようにまとめることができる。

- (1) 遊びの場所や遊びの人数については継続者、離脱者間に差はみられないが、戸外での遊びの内容が、継続者ではスポーツ遊びに限定される傾向がみられた。学習塾やけいこごとの実施状況については、継続者、離脱者間に差はみられず、スポーツクラブへの継続的参加や離脱とは別の次元で、学習塾やけいこごとの実施がすすんでいることが推察された。
- (2) スポーツにおける勝敗観については、「試合にでるからには勝たねば意味がない」、あるいは、「勝つためには、少々ずいことをしてもしかたがない」という、勝利至上主義的な意見に対して、継続者の方が肯定的な立場をとる者が多く、継続者の方が離脱者より勝利至上主義的な考え方をもっていることが明らかになった。また、「勝つつもりで試合をしないとよいプレイはできない」、「勝とうと思うから、一生懸命に試合ができるのである」など、勝利追求の姿勢を望ましいものとして是認する意見に対しても、継続者の方が離脱者に比べて肯定的な立場をとる者が多かった。
- (3) スポーツクラブでの活動に関しては、離脱者では、継続者に比べて、周囲の人の勧めでクラブ加入を決めた者が多くなっており、自分がやりたくて、自分の意志で加入を決めることが活動の継続につながるものと思われる。活動日数については、継続者と離脱者の間に差はみられなかった。活動時間については、土曜日や日曜日の活動時間は継続者の方が長い傾向にあり、活動時間の長さがそのまま単純に離脱に結びつくとはいえなかった。活動への参加状況は、継続者の方がよく、活動の楽しさも、継続者

の方が多く感じていた。離脱者は活動を休む理由に「別に理由はないが、行きたくないとき」をあげる者が多く、離脱の背景に、活動への意欲の欠如や、活動への興味や関心の喪失などがあることが推察された。そして、意欲の欠如や興味・関心の喪失につながることで、継続者に比べて技能レベルが低いことや、大会へ選手として出場する機会に恵まれないということがあげられる。

- (4) スポーツクラブでの活動意識については、スポーツクラブに加入してよかったこととして、そのスポーツがうまくなったことをあげる者、また試合で勝ったことをあげる者は継続者の方に多く、継続者が離脱者よりもスポーツ技能に関心を持ち、高い技能レベルにあること、また勝利に対しても高い関心をもっていることが推察された。

離脱との関係については、継続者のうち、約4割の者はクラブをやめたいと思うことがあると回答している。指導者にしかられたとき、友だちと遊べないとき、練習や試合で疲れたときなどに、クラブをやめたいと思うとしている。

離脱者は離脱の理由として、友だちと遊べないこと、あるいは、練習の量が多くてついていけない、練習や試合で疲れる、練習の内容がむずかしくてついていけないなど、練習や試合のあり方に関わる事項をあげる者が多い。また、あまりうまくならなかったという技能に関すること、他にやりたいことができたこと、さらに、指導者とうまくやれなかったという、指導者との人間関係をあげる者も比較的多い。ここにみられる、練習や試合で時間的余裕がなくなり友だちと遊べなくなること、練習や試合で生じる疲労、さらに、指導者との関係などは、継続者がクラブをやめたいと思う理由とはほぼ一致しており、現在、活動を継続している者の中にも、離脱者と同様な状況の中で、離脱の要素をかかえながら活動している者が少なからずいることが明らかになった。

- (5) 父母の関与状況については、継続者の方が、父母の練習や試合の参観の程度は高く、スポーツクラブで活動することに対してもよく励ましを受けていた。父母が子どものスポーツに関心を持ち、関与することが活動の継続につながると推察される。

参考文献

- 1) 藤原 誠・堺 賢治 (1987) 児童のスポーツ参加に関する研究—遊びとスポーツクラブ参加および両親の影響—。愛媛大学教養部紀要 20:654.
- 2) 藤原 誠・堺 賢治 (1988) 剣道スポーツ少年団

- に関する研究—両親の関与を中心に—, 愛媛大学
教養部紀要 21:65-75.
- 3) 藤原 誠・堺 賢治 (1989) スポーツ少年団の指
導者に関する研究. 愛媛大学教養部紀要 22:71
-72.
 - 4) 賀川昌明 (1985) 少年スポーツをめぐる諸問題.
日本スポーツ心理学会第12回大会ワークショップ
資料.
 - 5) 影山 健 (1987) 子どものスポーツの問題点. 体
育・スポーツ社会学研究 6:1-26.
 - 6) 工藤孝幾 (1987) 子供の心の成長とスポーツ経
験. 学校体育 40(9):26-30.
 - 7) 水内 宏 (1991) 子どもたちのすこやかな発達と
部活. 城丸彰夫・水内宏編 スポーツ部活はい
ま. 青木書店:東京, pp.28-33.
 - 8) 武藤芳照 (1985) スポーツ少年の危機. 朝日新聞
社:東京.
 - 9) 武藤芳照・深代千之・深代泰子 (1985) 子どもの
成長とスポーツのしかた. 築地書館:東京.
 - 10) 武藤芳照 (1989) 子どものスポーツ. 東京大学出
版会: pp.4-10.
 - 11) 岡村豊太郎 (1985) 少年スポーツクラブが心身の
発達に及ぼす影響. 学校体育 38(7):28-
33.
 - 12) 内海和雄 (1987) がんばれスポーツ少年. 新日本
出版社:東京, pp.18-36.
-